

## 2-4 取り組む課題

### (1) 都市の温暖化

気象庁のデータでは、年平均気温の上昇がみられ、特に冬の気温の上昇が顕著（冬日\*の減少）で昆虫などの越冬に影響を与えていると考えられています。また、人の活動による廃熱等で、東京都では市街地を中心にヒートアイランド現象\*が顕在化しています。これらの問題に対しては省エネルギー、都市緑化等の総合的な温暖化対策の取り組みが必要です。地球の温暖化は、生物多様性の危機\*のひとつとされています。

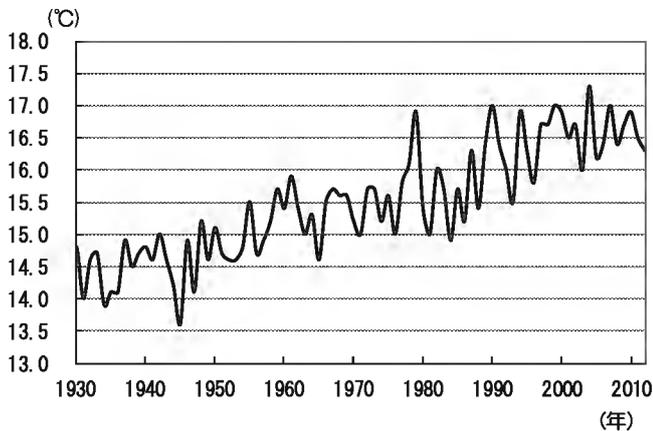


図 2-17 東京の平均気温の上昇<sup>R</sup>

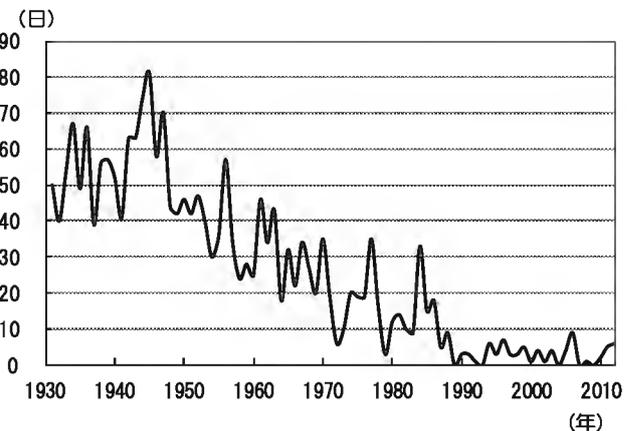


図 2-18 東京の冬日の減少<sup>R</sup>

### (2) みどりの減少

敷地の細分化や管理の負担が大きくなっていることなどによって、民有地内等にある樹木の減少が見られます。

樹木の本数は、2003(平成15)年の緑の実態調査では24,024本で、前回調査1992(平成4)年での26,303本と比較すると、11年間で2,279本(8.7%)減少しました。緑被率\*は、屋上では増加していますが、みどりの基本計画の目標(20%)に向けて一層取り組む必要があります。公園面積も少しずつ増えてはいますが、同計画で示されている一人当たりの公園面積(2.0㎡)に対して、依然不足しています。

農地面積は3.1haで、減少傾向です。また、湧水等の水辺が見られる場所も減少しています。

私たち人間がうるおいを感じ、そしていきものすめる環境として、水やみどりの保全と創出が課題となっています。

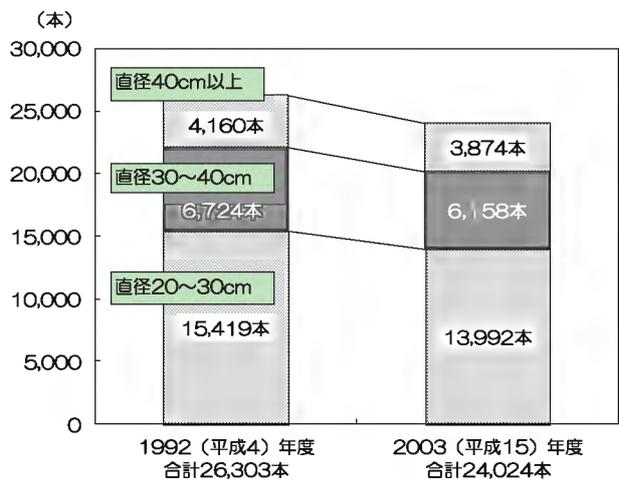


図 2-19 太さ別樹木本数の変化<sup>R</sup>

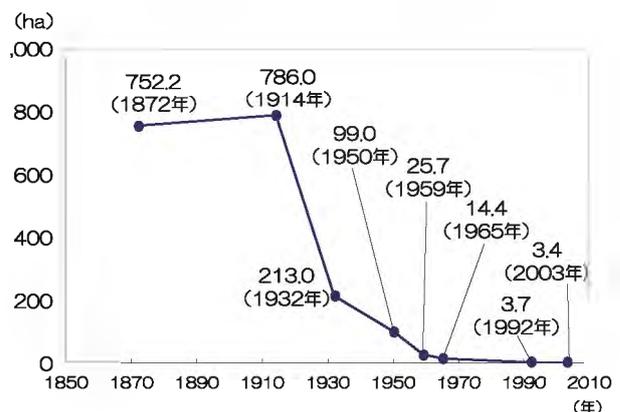


図 2-20 農地面積の減少<sup>R</sup>

### (3) いきものの変化

昆虫のチョウ類を例にあげると、以前は大きな緑地や庭で観察されていたダイミョウセセリは、1995(平成7)年を最後に区内での観察記録がありません。一方、南方系のチョウ、ナガサキアゲハは2004(平成16)年に、外来種<sup>※</sup>のアカボシゴマダラは2007(平成19)年にそれぞれ最初の記録があり、それ以降毎年観察されるようになりました。

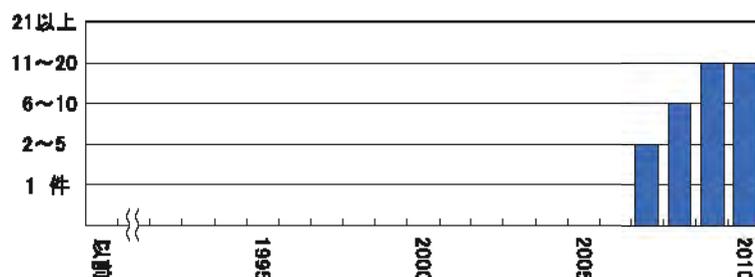
鳥類では、1980年代からコゲラ、1990年代からカワセミの観察例が増えています。また、1980年代からはアオサギ、ダイサギ、コサギなどのサギ類が、住宅や公園の小さな池でも見られるようになってきました。冬に北国から渡ってくるキンクロハジロ、ホシハジロなどのカモ類は、1990年代から目黒川等で観察されるようになりました。主要緑地での個体数は、1986(昭和61)年と1999(平成11)年の比較<sup>※</sup>で、コゲラ、メジロ、ムクドリ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ハシブトガラスなどが増え、カイツブリ、モズ、ジョウビタキ、ウグイス、キビタキ、ツグミ、アオジ、オナガなどが減少しています。

生物季節<sup>※</sup>は、サクラの咲き出す日やウグイスの初音<sup>※</sup>日などを記録していますが、1990(平成2)年ごろからミンミンゼミの初鳴き日がアブラゼミより早くなりました。

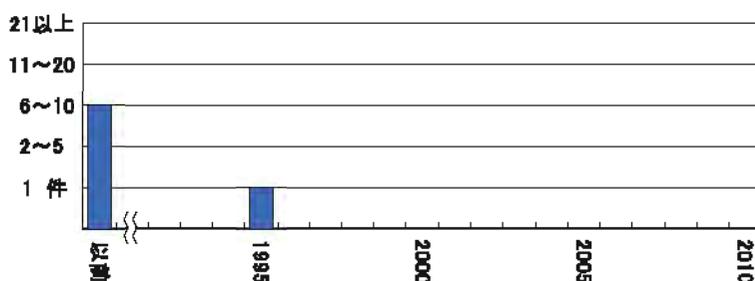
樹木等が減少し、樹木の根元まで踏み固められて樹林に下草等が生えていないなど、地表の裸地化や舗装化が進み、いきものがすみにくくなっています。いきものは樹木や土の部分を伝って移動しますが、樹木や池、地面が減り、移動経路が分断されています。また、外来生物の増加も見られ、生態系や人の暮らしへの影響が懸念されています。



外来種のアカボシゴマダラ



減少が見られる在来種<sup>※</sup>のダイミョウセセリ



見られることが多くなった南方系のチョウ、ナガサキアゲハ

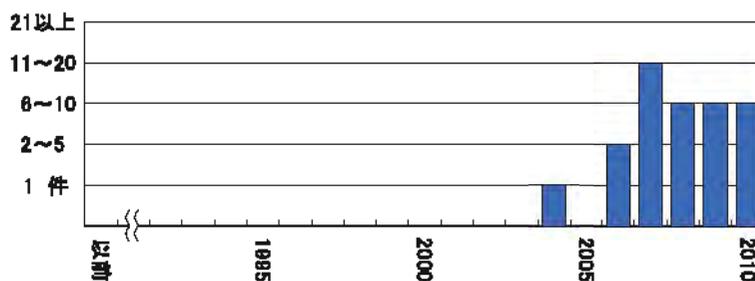
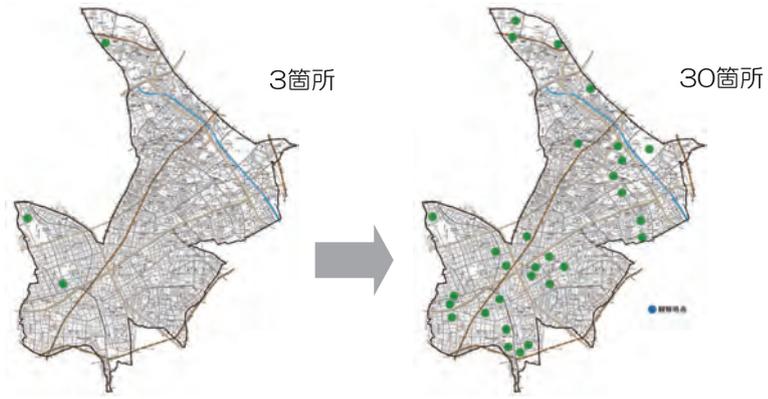


図 2-21 チョウの観察記録数の推移(いきもの住民台帳より集計)



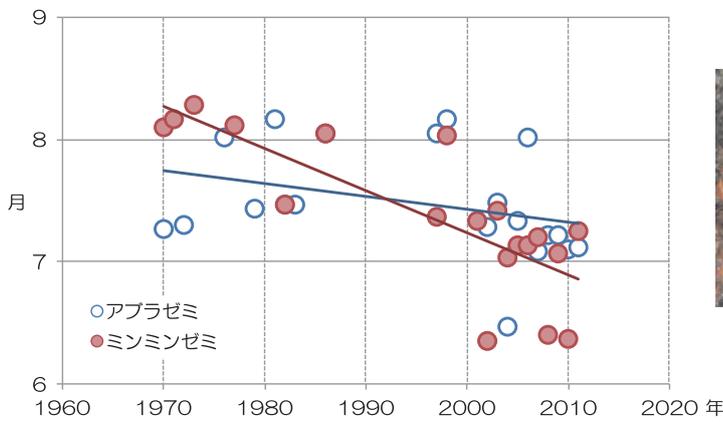
ヒナを育てるコゲラ



1985(昭和60)年からの5年間

2005(平成17)年からの5年間

図 2-22 コゲラの観察箇所の変化



左:アブラゼミ 右:ミンミンゼミ

ミンミンゼミがアブラゼミより早く鳴き出すようになりました

図 2-23 セミの初鳴き日の変化

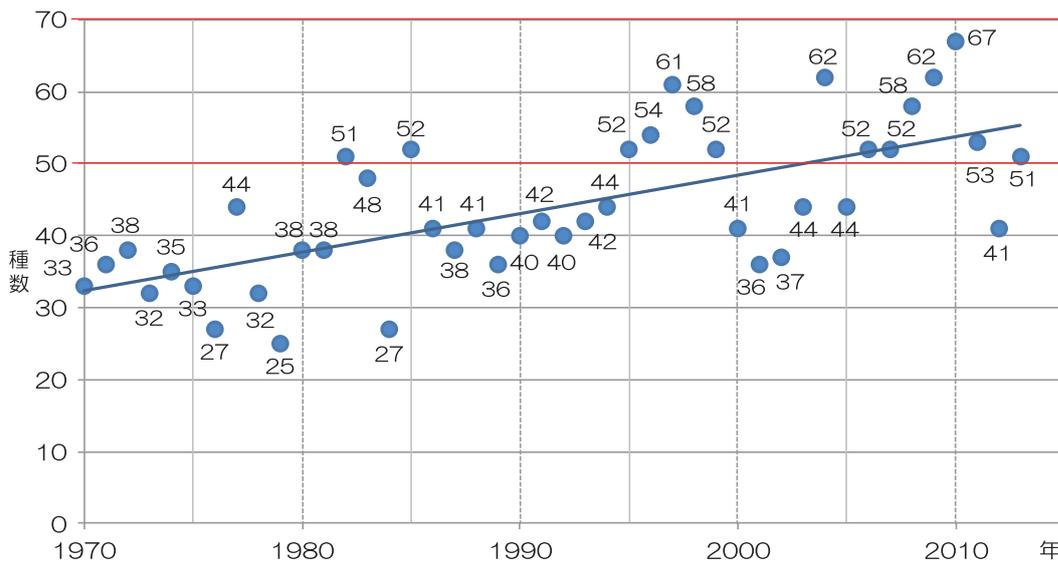


図 2-24 年間に観察された野鳥の種数の変化(外来種等は除く)

いきもの住民台帳から集計したものです。10年単位で見ると増加が見られます。これは春秋に通過する渡り鳥や、冬越ししている冬鳥の観察種数が増えているほか、1990年代からは目黒川や碑文谷公園の池等で冬越しするカモ類の種数が増えたことによります。区内で繁殖をしている鳥類はほとんど変化がなく、カルガモ、キジバト、ワカケホンセイインコ、ツバメ(夏鳥)、ヒヨドリ、メジロ、シジュウカラ、オナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ムクドリ、スズメ、カワラヒワ等となっています。ツバメ以外は、一年中区内で見られる留鳥(P.86)です

#### (4) 区民の意識と暮らし

都市の住民の消費活動は、他の地域の生物多様性に大きく影響を与えています。自然の恵みである食品では、莫大な量の食品を無駄に廃棄し、食品ロス\*として問題視されています。2011(平成23)年の目黒区世論調査では、「生物多様性」の言葉の認知度は「知らなかった」が6割近くとなっており、「よく知っていた」「少し知っていた」を合わせた4割より多くなっています。また、生物多様性の施策への要望は、自然環境の保全や回復施策が上位を占めています。

公園活動登録団体\*やグリーンクラブ\*団体数は増加しています。駒場野公園では、自然クラブや地域などの参加で、雑木林\*などの里山\*管理が続いています。これらの活動を継続していくためのボランティアなどへの支援、人材の育成、情報を共有できる場や機会の提供が課題となっています。

区民一人ひとりについて、「ものの豊かさ」から「こころの豊かさ」を大切にしていくライフスタイルへの転換が求められています。

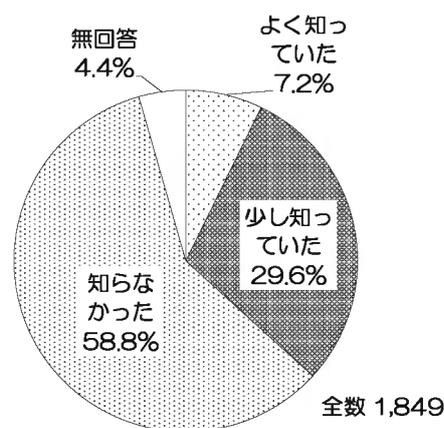


図 2-25 生物多様性の認知度<sup>Ⓐ</sup>

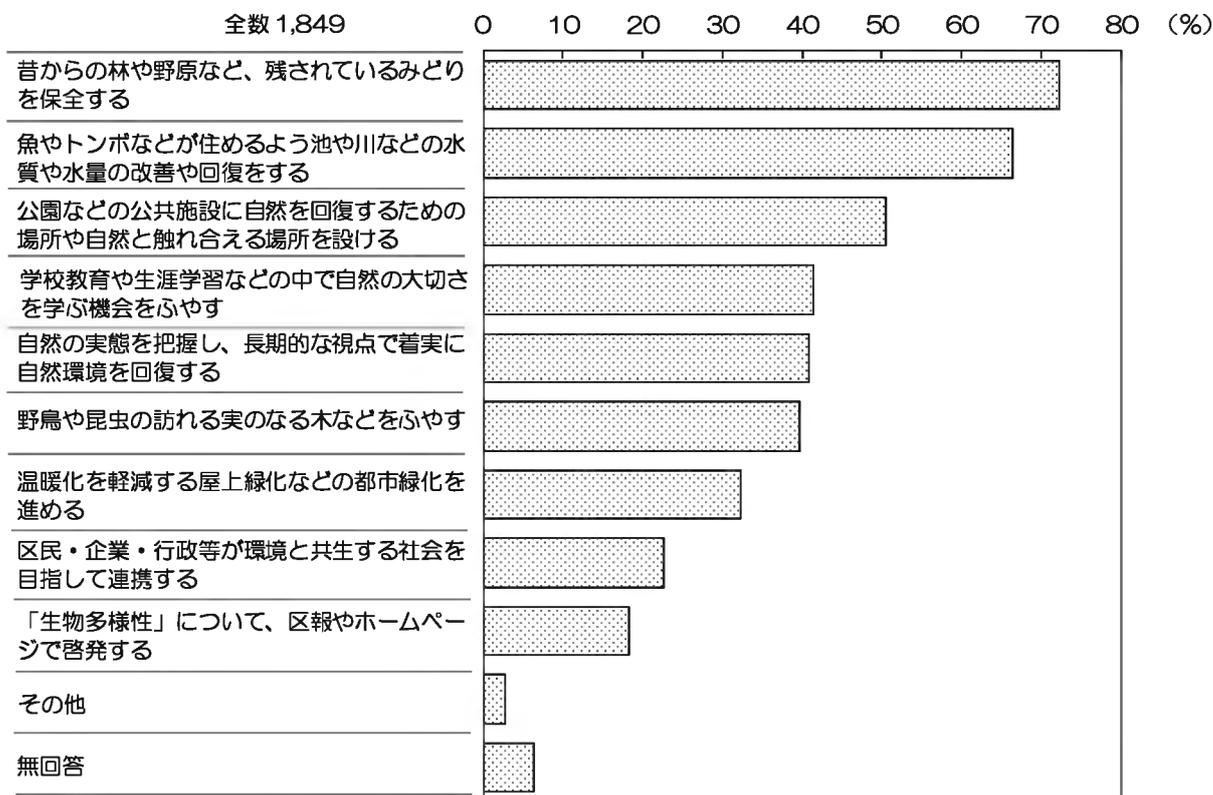


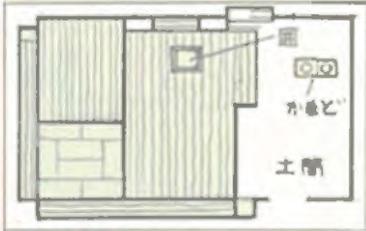
図 2-26 生物多様性関連事業で重要なこと<sup>Ⓐ</sup>

陽春  
4月

・ツバメが飛来するころ — みどりのオアシス「屋敷林」

みどりの島のように市街地の中に残る「屋敷林」。古くから、防風や自然の恵みを得るために、家の周りに育てられた林です。今、大きく育った木々は、いさもたちのいのちを支える貴重なみどりです。

・すすめのお宿緑地公園 昭和の始めころ、この竹林は、たくさんのスズメがねぐらをとりに集まるので「すすめのお宿」と呼ばれた。夕方には数千羽のスズメで空が暗くなるほどだったとか…。



・古民家 公園内に移築された古民家。1970年代まで「八雲の栗山家母家」だった。4月中ごろから鯉のぼりが泳ぐ。



・この時期、新緑の葉かげには飛びの途中の夏鳥が見られる。  
・こんな出会いも… 『オオムシクシ』4月下旬の早朝、高い木の梢でさえずるオオムシクシを目撃！美しく歌う。(鷹番・自然通信員)



・『オオムシクシ』スズメ目、ヒタキ科 全国の山地で巣を作り冬は南国に渡る。春秋の渡りの時期に区内でも見られる。



・かまどの煙 土間にあるかまどには、今でも毎日火が入られ、その煙でいぶされて建物が守られる。自然の力を活かす知恵がある。



・屋敷林に残された武蔵野の野草 (碑文谷)

図 2-27 ムクノキやモウソウチクのある屋敷林の風景(すすめのお宿緑地公園) 区民による身近な生物調査\*より